

shaigaku

# ひろば

2024年 No.6



## Contents

特集 こんな授業、やってますっ！	3p 教員紹介	12p
特集 可能性を広げる！ダブルスクール	7p 創立50周年記念事業	14p
輝く社医学卒業生	10p	

学校法人 日本リハビリテーション学舎

専門学校 **社会医学技術学院**

# 社医学の今昔

## 専門学校 社会医学技術学院 副学院長 帯刀隆之

成人学習(andragogy / adult education)という言葉がある。義務教育など児童・生徒を対象とした一般的な教育に対して、成人学習とは「成人の特性を生かした学習援助論」である。

理学療法士及び作業療法士の歴史が始まった草創期、1973年に社会医学技術学院は創立された。当時すでに医療や福祉の現場に従事していた人たちが、新たに制定された国家資格の取得を望み集つた言わば私塾であった。臨床で日々抱く数々の疑問にどうにか解決の糸口を見つけようと授業に臨む。今から思えば、まさに成人学習の実践が繰り広げられる現場であった。



もとより教科書と呼べるような体系的にまとめられた書籍などなかった時代である。時間割や教室割りなどもないようなもの。ときには長座卓を囲み泡の出る金色のお茶を片手に講師は熱弁をふるい討論を交わす、そんな場面が幾度もあった。場所の適否は別にして、高等教育におけるゼミ形式という一つの学びの形が、そこには確かに出来上がっていた。

時代は移り養成校も林立した。専門教育は洗練され内容は質・量ともに膨大となった。一方、集う人たちは高校現役生や大卒といったごく一般的な受験生で占められるようになった。おのずと職業意識への強い動機や使命感など期待できない現況となった。かつての学習者側の能動性を当てにした授業の進め方はもはや適用できない。周到な授業設計のもとで、明確な目標へと導く必要がある。反面、同時に学習者らの自主性も尊重し自ら学ぶ態度の育成も果たさなければならない。

本校創立50周年を折り返した今、教育体制の従来型にとらわれない改革が急務である。



### 表紙について

今回の特集企画では多くの授業を取材しました。真剣なまなざしとともにたくさんの笑顔が見られ、学ぶ楽しさがそこかしこにあふれています。先生方、学生のみなさん、ご協力ありがとうございました。

※本誌の内容は、2024年3月時点のものです。

# 特集 社医学は、こんな授業やってますっ！

「授業」と聞いてどんな光景を思い浮かべますか？

先生が前に立ち、黒板に板書したものを一生懸命書き写していく。

または教科書の内容をひたすら音読していく……。

そんなオーソドックスな授業を想像する人も多いかもしれません。

しかし、社医学には学生が直接手に触れ、体験しながら楽しく学べる授業がたくさんあります。

今回はそんな社医学の魅力的な授業を少しだけ紹介しますっ！！

## 理学療法技術論（理学療法学科夜間部4年次）

### 理学療法の『今』を学ぶ

「理学療法技術論」は、4年間の基礎・専門分野と各学年で実施する臨床実習を修了した上で、理学療法の『今』をオムニバス形式で学ぶ、最終学年の最後に位置する科目です。

学ぶテーマは「疼痛の理学療法」「ロボットリハビリテーション」「精神疾患の理学療法」などさまざま。その中で今回紹介するのは「パラスポーツ」の授業です。

担当の田中信行先生は、日本体育大学教授かつ本校の卒業生であり、国内外で活躍されているパラスポーツ研究の第一人者です。

本校は2023年度から「初級パラスポーツ指導者認定校」となったこともあり、さらにパラスポーツを推進し、障害者の方々との交流を広げたいと考えています。



### 田中先生に聞く！ パラスポーツの講義とは

講義では、パラスポーツに理学療法士が関わる意義やパラリンピックを中心にどのような競技をどのように行っているのかを紹介するとともに、障害区分という、競技を行う際の障害の種類や程度に応じたグループ分けの概要も紹介しています。

実技では特徴的な競技ができるだけ体験してもらうため、車いすスラローム、シッティングバレーボール、ボッチャ、車いすバスケットボールを、グループで行います。



パラスポーツ領域担当 田中信行先生(写真中央)

## 授業のねらい

理学療法士の専門的手技・手法等と同じで、スポーツも当事者の方の状況に応じてアプローチを工夫して行うことが大切です。

またスポーツは単に身体活動だけではなく、精神的な活性にもなり、さらに人とのつながりの機会となり、当事者の方達の「生活意欲へのアプローチ」にもなると考えます。理学療法士は、誰よりもその機会があるといえます。

そのため、まずは授業を通じて、より専門性の必要なクラス分けの知識を得る機会にしていただくとともに、実技を通じて自らがパラスポーツを楽しんでもらいたいと思います。



理学療法学科夜間部4年 福島彪三さん

## 学生に聞いた この授業どうだった?

実際に車いすバスケを行い、各疾患によって、どこにリスクが潜んでいるのか体験することで初めて理解できることがあると気づきました。

当事者の今ある機能を最大限に生かし、スポーツを行うことで得られる団結力や達成感は、さらなる生活意欲や社会参加に良い影響を与えるものだと感じました。

「より多くの当事者の方がスポーツに参加しやすい環境」とは何かを考え、一つでも多く当事者の可能を増やすサポートをすることが、理学療法士の意義であると学ぶことができた貴重な講義でした。

## 日常生活評価学（作業療法学科夜間部2年次）

### 当事者の苦労を“経験”する

障害を負った当事者が元の生活に戻るために、作業療法士は『日常生活での動作』が行えるよう治療していきます。

担当の福井健太郎先生は、「当事者の日常生活動作を評価できるように、知識・技術を身に付けることがこの科目の目標です」と話します。

授業では主に、日常生活の動作の中で、生活を送る上で必要な「食事、整容、更衣動作、排泄動作、入浴動作」について学びます。

例えば、右半身が麻痺で動かなくなってしまった場合、当事者は何ができる、何が難しいのか？ それらを理解するために実技を通して学んでいきます。





## 福井先生に聞く! 日常生活動作の評価とは

今回は食事についての授業で、①スプーン操作と箸操作の動作を観察し（動作観察）、言葉にしてみる（文章化）、②利き手ではない方の手で実際食べてみる、の2点を主軸に行いました。食べている動作をスマホなどで動画撮影し、映像を見ながら動きを分析します。

「どんな食べ物だと食べにくいのか」「治療をす

るならどういった食べ物から導入していくとよいのか」。実技では、実際に何に困っているかが実体験できるように工夫しています。

例えば、食事をするのも利き手で行うのではなく、利き手ではないほうの手でスプーン操作や箸操作を行って実際に食べてみます。

スプーンならできると思うかもしれません、実際にスプーンを口に入れて引き抜くと、入れるときの感触も引き抜く感触も、利き手とは違った違和感を感じるはずです。ぜひ試してみてください。

## 授業のねらい

2年生では当事者の動作観察や、検査等を通して何ができるか判断（評価といいます）することが求められます。その基本的なことをしっかり身に付けられるよう授業を組み立てています。

現場の作業療法士が何を考えて観察・評価し、治療介入しているのか。といったことも、少しでも多く伝えられるようにと思っています。実際、就職してからも改めて勉強することになります。

当事者の役に立てるように。当事者の立場に立って考えられるように。日々、そのような気持ちで講義をしています。



科目担当 福井健太郎先生



作業療法学科夜間部2年 小嶋祐太郎さん

## 学生に聞いた この授業どうだった？

普段利き手で無意識に行っている食事動作を、利き手が麻痺した当事者の立場になって非利き手で行うことで、些細なことがいかに難しく、ストレスのかかることであるかを実感することができました。

これらのこととは、実際に当事者の立場になって体験したことで見えてきた、生活上の問題の一部分にすぎないと思います。

その一つ一つの機会を大切にし、当事者の視点から治療ができるセラピストになりたいと思います。

# 他にもあります！楽しい授業！

## 日常生活活動論演習（理学療法学科）

この科目では、実習や卒後の臨床で関わる代表的な疾患をもつ当事者に、日常生活の自立のための動作訓練の「考え方」を伝え、習得してもらうことを何よりも大事にしています。

生活を送っていく中で行う動作は、たとえ同じ疾患の方であっても環境や目的・その方の希望などによって大きく異なります。

当事者の疾患特性とリスク、さらには生活環境や当事者のニーズを踏まえて、最適な動作の方法を考案、習得までのプログラムを立案する。柔軟な思考と発想力、優れた洞察力を、この授業を通じて身に付けることを期待しています。



学生の障害体験を援助する  
科目担当 中山雅和先生(写真右)

## アントレプレナーシップ入門（理学療法学科）

「アントレプレナーシップ入門」は、創業までのプロセスを学び、事業を継続していくための取り組みを、ワークを通して学ぶ授業です。

理学療法士の働く場は病院や福祉施設がその大半を占めますが、昨今、訪問リハビリテーションを立ち上げたり、健康関連企業に働いたりとその職域が拡大しつつあります。

学生自身が自分を見つめ、自身の棚卸しを通して自分の適性ややりたいこと向き合う。さらには変化の激しい社会の中で、社会課題を発見する。そこから自分のやりたいことや社会課題を解決することに新たな人生の価値を創造するために、創業という方略を学ぶことを目指しています。



起業経験のある卒業生 森安みか氏を紹介する  
科目担当 小島肇先生(写真左)

## 基礎作業学演習Ⅰ（作業療法学科）

作業療法では、当事者の作業療法支援の手段の一つとして、革細工などの手工芸を行うことがあります。例えば、認知症で家族の支援が必要なAさん。本人は自身の状態に対して「情けない」という感情を抱いています。作業療法士はAさんに聞き取りを行い、かつてご家族のためにやっていた編み物を提案。家族にプレゼントすることで、Aさんの自己効力感につながりました。

当事者にとって意味のある作業を行うことは、心身機能の改善だけでなく自己効力感や家族内での役割などさまざまな波及効果をもたらします。本授業では、作業療法において扱われる手工芸を行い、どのような効果が見込めるのか身をもって体験し、自己分析まで行っています。



学生が作成した革細工作品を確認する  
科目担当 木下輝先生(写真左)

# 特集 可能性を広げる! \\ダブルスクール//

「ダブルスクール」とは、同時に2つの学校へ通うことを意味します。例えば、昼間は大学で幅広い学問を学び、夜間は専門学校で資格取得を目指す。時間を有効活用しながら、自分の可能性をさらに広げていきたい人には、まさにうってつけといえるでしょう。

昨今は、専門学校が大学等と提携し、学校の制度としてダブルスクールを認めているケースもあります。本校では、大学で履修した単位を本校の単位として認定する制度が設けられており、両立の実現を後押ししています。

具体的には、大学等で履修した授業科目や内容が本校のカリキュラムと一致する場合、本校の単位として認定し、その科目の履修を免除する制度です。

2023年度から本校と提携を結んだ東京女子体育大学・東京女子体育短期大学キャリアセンター所長の櫻田淳也教授は、「理学療法士や作業療法士等に興味のある当

学の学生は少なくない。競技を続けながら国家資格である療法士を目指せるのは、学生の希望をかなえることにつながる。社医学は距離も近く、単位の互換が可能な授業も多い」と、そのメリットを強調します。

さらに、本校では入学者以外でも科目が履修できる制度を設けています。本校の学生と一緒に授業を受講して、試験を受け合格すれば単位が取得できます。その後に入学した場合は、卒業に必要な単位として認定されます。

入学前から学校の雰囲気や授業の進め方が体験的に分かるので、入学後のイメージがつかめるというメリットもあります。大学在学中に科目履修生となり、無理なく学べるか確認してから進学する、といったことができるのです。

自身の可能性を広げ、将来の選択肢を増やすダブルスクールが当たり前の時代がすぐそこまでできています。



# 特集 可能性を広げる！ダブルスクール

## ダブルスクールで本学に通っている学生 2名にインタビューしました。

// DOUBLE SCHOOL // DOUBLE SCHOOL // DOUBLE SCHOOL // DOUBLE SCHOOL //

### さまざまな人に支えられ 学んだ一年間

— 安田さんがダブルスクールを開始したのはいつ頃ですか。

大学ではスポーツに関係する身体機能や健康づくり、ビジネス、コーチングなどを学んでいました。

4年生の時に社医学に入学して、1年間ダブルスクールで通っていました。

— 理学療法士を目指そうと思ったきっかけを教えてください。

大学1年生の時に膝をけがしてしまい、入院・手術をしました。その際に理学療法を受けたのですが、身体が治ると家族や友人が喜んでくれました。そこで理学療法士は周りの人も喜ばせることができる仕事なのだと実感しました。もともと、身体のことを学ぶのが好きだったこともあり、自分の興味を生かせる仕事だと感じたことがきっかけになりました。

— その時にすぐに理学療法士を目指そうと思ったのですか。

大学を中退することや専門学校への入学は考えませんでした。けれど大学3年生の時にたまたま社医学のパンフレットを目にして再び興味を持ちました。

友人からも「社医学は良い学校らしいよ」と聞い



安田 汐里さん

理学療法学科夜間部4年生／法政大学  
スポーツ健康学部4年次に社医学へ入学

ていたので、見学に行ってみようかなと思いました。

— 実際に来校してみていかがでしたか。

最初に学校説明会に参加した時の先生方の説明がとても丁寧だったのが印象的で、社医学では困ったことはすぐに聞けそうだし、勉強以外のことも相談できるのではないかと思いました。他に、学費のリーズナブルさや歴史の深さなども学校選択の決め手となりました。

— ダブルスクールの大変さはありましたか。

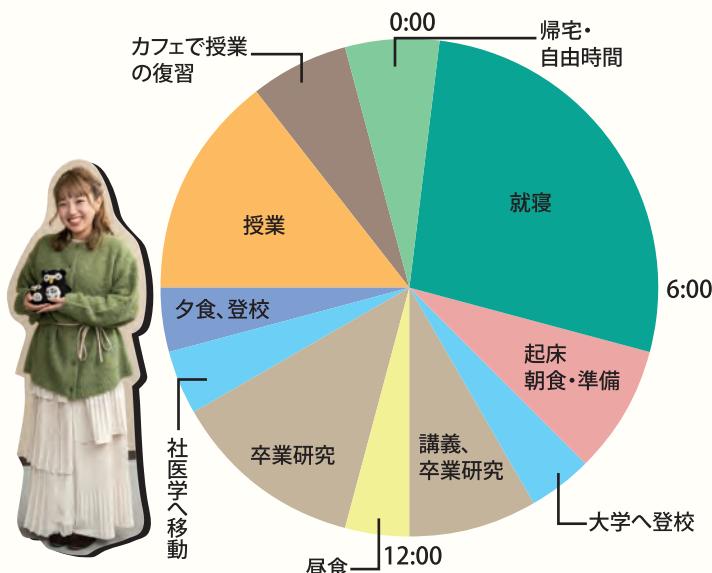
大学の卒業研究と重なって、社医学の授業との両立が大変でした。ただ、私と同じような経験をした社医学の先生に、卒業研究や普段の悩みを相談できたことが助けになりました。今では大変なことをやり切れたことが自分にとっての大きな自信になりました。

— この春卒業されますが、振り返ってみて、社医学での経験はどのようなものでしたか。

授業はもちろん、それ以外の部分での経験も大きかったです。例えば、リハビリ助手のアルバイトでは、実習や授業に生かせる内容を多く学べました。また、学校では先生方や社会人経験者の同級生などさまざまな人が相談に乗ってくれたことでひとりじゃないと感じられ、安心して学習することができました。

これから入学する方にも、ぜひ社医学の良さである温かみのある人と人とのつながりを大切にして、学んでいってほしいと思います。

### ダブルスクール時の一日のスケジュール



// DOUBLE SCHOOL // DOUBLE SCHOOL // DOUBLE SCHOOL // DOUBLE SCHOOL //

// DOUBLE SCHOOL // DOUBLE SCHOOL // DOUBLE SCHOOL // DOUBLE SCHOOL //

## 大学で悩み迷う中、 見つけた将来像

—社医学に入学した経緯を教えてください。

子どもの頃からやっている野球を続けたくて、野球部がある日本大学に進学したのですが、コロナ禍で活動が制限され、次第に進路に迷うようになり2年次に退部しました。そうした中、将来の目的を見失ったままではいけないと思い、3年次に始めたディサービスのアルバイトを通してリハビリの知識を学びたいと思うようになりました。目的もなく大学に通って時間を無駄にするよりも、自分が興味持てる職業について学びたいと思い、社医学に通うことを決めました。

—なぜ作業療法士を目指そうと思ったのですか。

アルバイト先の上司が作業療法士の資格について教えてくれました。実は私の祖父は足腰が悪く、外食などに出かける際に少しでも楽にできないかと感じていたこともあって、作業療法士という仕事に興味を持ちました。

—社医学を選んだ理由を聞かせてください。

最初にインターネットで家から近い専門学校を検索して、学校説明会に参加しました。説明会では右手が不自由になった際に左手で字を書く利き手交換の体験をしたのですが、当事者の困難さや支援の仕方のイメージがとても分かりやすかったことが選択の決め手になりました。

—入学までに不安や心配なことはありましたか。

正直なところ、入学前は両方の学校を両立させることへの不安もありました。しかし、このままだと野球を辞めたことを後悔するかもしれないと思い、自分で決めたことにきちんと取り組みたいと考えて入学しました。

—実際、ダブルスクールで大変なことはありますか。

大学との両立は想像以上に大変でした。しかし、将来像が具体化したこと、卒業研究も高齢者に対する音楽の効果として、作業療法に関連するテーマを選ぶことができました。社医学の授業では今まで知らなかった身体の知識なども得られ、大学よりも



室田 丈さん

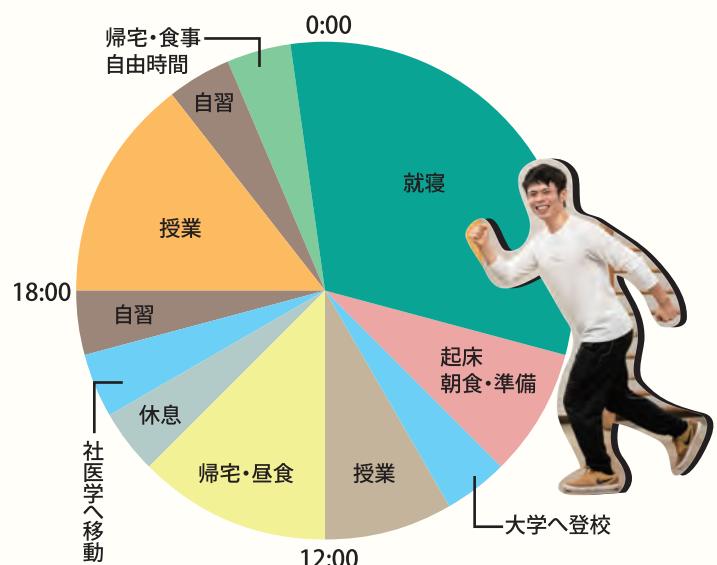
作業療法学科夜間部1年生／日本大学  
生産工学部4年次に社医学へ入学

主体的に学ぶことができます。

—社医学での経験や学習環境については、どのように感じていますか。

大学では見られない、さまざまな年代の先輩や同級生と交流の機会があることや、先生方とも相談しやすいことなど、学ぶ場として充実した環境にあると感じています。個人的なものではありますが、私の体験が皆さんの参考の一助になれば幸いです。

### ダブルスクール時的一日のスケジュール



// DOUBLE SCHOOL // DOUBLE SCHOOL // DOUBLE SCHOOL // DOUBLE SCHOOL //

# 輝く医学卒業生

## アスリートを支えて

—治療に関わった選手の復帰していく姿にやり甲斐—



高橋 佐江子さん

理学療法学科昼間部2001年卒業

高校時代はソフトボール部に所属しており、大学では理工学部で物や道具を人間工学的に考える勉強をしていました。理学療法士を目指したのは、就職を考えた際に国家資格が取得できることと、仕事としてスポーツに関わることができることが大きな理由でした。

社医学を選んだのは、大学から始めた野球を続けながら学ぶことができる環境が魅力的だったからです。必ずしも「いい学生」ではなかったと思いますが、社会人入学者として授業にはまじめに取り組んでいたと思います。

学生時代で印象に残っていることとしては、科目試験の合格に「ウィリー(車椅子の前車輪上げ)」が課されたことや、国家試験前の2週間、クラスメートと短期集中特訓をして乗り切ったことなどが思い出されます。また、学生時代からトレーナーとして活動しており、アクティブな学生生活を送ることができたと思います。

卒業後は横浜市スポーツ医科学センターに勤務、メジャーリーグ球団での帯同を経験するなど、スポーツ現場での臨床経験を積んできました。加えて、働きながら筑波大学大学院で修士課程を取得、2010年から国立スポーツ科学センター・スポーツメディカルセンターで臨床と研

究に日々取り組んでいます。

現在の主な業務としては、治療後のアスリートに対してアスレチックリハビリテーションを実施したり、さまざまなスポーツの遠征チームに帯同してコンディショニングサポートをしたりしています。臨床業務と並行して、よりよい治療アプローチを考えるための研究業務も行っています。

臨床業務の一番の醍醐味は、治療に関わった選手が復帰していく姿を見て自分が役に立ったと実感できることです。その一方で、もっと良い治療方法があったのではないか、もっと早く選手を復帰させることができたのではないか、という反省を積み重ねていく毎日です。

在校生(後輩)の皆さんに伝えたいことは、スポーツ好きの人にとって臨床業務は絶対に楽しいですし、やり甲斐がある仕事だということ。自分自身の目標を立て、それに向かって主体的に行動していってほしいと思います。

### たかはし・さえこ

慶應義塾大学理工学部卒業後、社会医学技術学院昼間部入学。卒業後、横浜市スポーツ医科学センターを経て、現在国立スポーツ科学センターに勤務。

## 多様な社会の在りかたを考え支援

一切磋琢磨した社医学での経験を生かす



戸田 竜也さん

作業療法学科夜間部2017年卒業

私にとって作業療法は、双子の兄が脳性まひの当事者だったこともあり、物心がついたときから近くで見ていた身近なものでした。そうした経験もあり、高校在学中に作業療法士になりたいと志しました。

3歳上の兄が社医学の理学療法学科に通っていて、塩澤伸一郎先生を尊敬していたこともきっかけです。こうした環境への憧れがあって社医学に入学しました。10代の私にとっては作業療法学科の山口昇先生や河野達哉先生をはじめ、敬愛できる先生に学ぶことができる場は非常に有意義でした。

在学中は精神科デイケアで日中働きながら学びました。当事者の方々と出掛けて地域社会の中で一緒に過ごした経験が強く印象に残っています。また、学生の頃は休暇中に海外を回るなどして、多様な文化に触れる機会を得ました。

クラスの学生の年代はさまざまでしたが、経験や年齢が異なる人が集まり切磋琢磨していく経験が、現場で人と議論しながら進めていく下地になったと感じています。

現在、私は社団法人の代表として、埼玉県川越市で相談支援事業と精神科訪問看護ステーションを運営しています。社医学を卒業後、精神

科病院、クリニック勤務を経て、2022年に当法人を設立しました。

当法人のある川越市は精神科病院の病床数が全国と比較して多く、長期入院や身体拘束などが問題となっています。入院中は地域社会よりも当事者個人に問題点が向けられやすく、人としての権利がないがしろにされがちです。当事者の人としての権利を尊重する権利擁護の視点からは、個人が暮らしやすい社会の受け皿の整備が重要です。こうした考えが、当法人を立ち上げるきっかけとなりました。

医療の世界は良くも悪くも狭い世界で、それが時に思考の幅を狭めてしまうことがあります。社医学の良さは多様なバックグラウンドを持つ人が一緒に学べることだと思います。単に資格を取得することだけでなく、さまざまな人に触れ、自分の世界を広げる学生生活を送っていただければ幸いです。

### とだ・たつや

東京武蔵野病院、岡崎クリニックを経て22年に一般社団法人SCRAP & BUILDを設立。

# 教員紹介

本校では、絶えず新しい専門的知識や技術を取得するため、教員の自己研修をすすめています。今回は、療育分野における研修活動を紹介します。

## 「臨床感を持った教育を目指して」 —子どもの相談支援

理学療法学科教員  
**中山雅和**



私は週に1日、小金井市の発達支援センターで障害をもった未就学児のリハビリテーションや発達遅滞が疑われる子どもの相談支援に携わっています。

もともと、理学療法士を志す前は保育士になりたかったこともあります。子どもに関わる仕事に興味がありました。理学療法士になってからは、成人のリハビリテーションにしか関わったことがなかったのですが、本学の山田千鶴子理事長からの紹介で市の発達支援センターに関わらせていただいたことが子どもの相談支援に携わるきっかけです。

子どものリハビリでは、成人のように決まったプログラムを組み、順序だてて行うことは難しく、まずは子ども自身が抱いている理学療法士への警戒心を解いていくことから始まります。その子ども自身の興味を刺激する玩具は何かを考えながら、子どもの「ここで遊びたい！」という気持ちを引き出すことが、介入にあたって最も大切な点だと感じています。

実例を紹介すると、興味のある玩具を糸口に少しづつ信頼関係を構築していくながら、必要な動作の誘導を行っていきます。玩具を高い台の上に配置することで上方へのリーチ動作を誘導したり、少し離れた場所に置くことで探索行動を誘発して、はいはいの練習をしたりするなど、毎回違う仕掛けを考えて介入を行います。

理学療法士は主には歩行の獲得に至るまでの運動発達に対して介入することが多いため、0歳児から関わることが多くなります。運動発達が

進んでくると、その他にも知的な問題や特性が明らかになることも多く、作業療法士や言語聴覚士の療育へとつなげていくこともあります。

実習や授業の中では、発達や小児の話を聞く機会は決して多くはありません。しかしながら、興味を持つ学生も一定数おり、そうした学生に對して実際の現場の話ができるることは非常に意味があると感じています。また、理学療法士として現場に立ち続けることで、常に原点である『臨床家』としての心構えや意識の大しさや熱を学生に伝えられる点も教育を行う上で意義があると思っています。

社医学の目指す『即戦力の理学療法士の養成』のためにも、常に最新の知見をもって臨床に携わることが、より臨床感を持った教育を行うために重要であると考えています。



立位訓練を行なながら  
足の角度を調整

# 「私、実は子どもが苦手でした…」

## —特別支援教育、発達相談に関わって

作業療法学科教員

兵頭洋子



「子どもは宇宙人…じゃないのか？」

そんな私が小児の分野に足を踏み入れたのは、学生のときの実習で重症心身障害がある方と出会ったことがきっかけでした。言語表出が全くない方でしたが、表情がとても豊かでちょっとした環境の変化に気付ける方でした。ある時、その方が突然、部屋の入り口に目を向けるということがあります、「何事？」と思った数秒後、お母様が入ってくるというありました。

それ以降、「普段、この方はどのように感じ、どう考えているのだろうか？ 彼らの世界はどんな世界なのだろうか」という好奇心が湧き、この分野に携わることになりました。あれから20年、現在では発達障害のお子さんまで対象を広げて、特別支援教育、発達相談の仕事に携わっています。

小児の分野でのリハビリテーションも基本的な考え方は成人と同じと思っています。違うとすれば、成人の場合は病気や障害により失った機能・能力の再獲得を目指し、小児の場合は未獲得の機能や能力の獲得を目指すという部分でしょうか。作業療法の中では、日常生活活動や遊び、学びができるように、また年齢と共に難しくなる社会のルールの中で、その人なりに過ごせるようになることを子どもが興味をもった活動

(多くは遊び)を通して目指しています。

現在、小児分野の作業療法士の勤務先は多種多様です。社会制度が改正されたことで、より生活に近い場で子どもたちを診ることができますようになりました。療育機関での個別の作業療法は小学校への就学頃に終えることが多いですが、その後、どのような困難を抱えていくのか、特別支援教育の現場に出ることで初めて知りました。

教員をしながらの勤務なので、療育機関で勤務していた頃に比べるとお子さんに関われる頻度は少ないので、さまざまな勤務先で新たな視点に気付かされ、また長期的な視点で目の前の子どもを診なくてはいけないことを学べるなど、自分の視野が広がったと感じています。

私が子どもとの関わりを通して得た一番の学びは、「知れば知るほど興味深く、苦手意識はなくなるもの」だということ。今後は、さらにお子さんの生活に近い訪問リハビリテーションや放課後等デイサービスなどにも関わいたらと思っています。

作業療法士として、私ができることは少ないかもしれません、養成校の教員という立場から自分が経験して学んだことを、卒業生を通して子どもたちに還元したいと考えています。

# 創立50周年記念事業

2023年7月16日（日）、当学院の50周年記念事業が行われ、200名を超える方々がご参加くださいました。本誌では、当日行われた記念シンポジウムの基調講演と記念講演を紹介いたします。

## 記念シンポジウム 「これからの社医学を考える」

川本愛一郎氏

作業療法学科夜間部1期生

有限会社リハシップあい  
代表取締役



「探しもの」をする中で偶然、もっと大切なものが見つかるという意味の「セレンディピティ」。川本氏はその観点から、今後の社医学へエールを送られた。

川本氏自身の「探しもの」は「地域リハビリーション」で、熊本県水俣市でさまざまにリハビリサービスを雇用する起業のきっかけになったと説明された。社医学の学生には医療・介護の範疇を超え、社会にどう関わっていくかというマインドに期待したいと述べ、自分の「探しもの」を始めたときに、理学療法士・作業療法士の専門性は社会と関わる上で重要な役割を果たしたと振り返った。

清宮清美氏

理学療法学科夜間部6期生

東京保健医療専門職大学  
教授



実務家教員と臨床家の違いについて、自身の歩みを交えながら意見を述べた。

専門職大学では実務・実践の教育を重視し、関連する他分野の知識も学び、卒業後は企業への入職等を含めた幅広い活動を行えるような教育を目指している。一方、臨床で活躍したいという希望がある場合は、社医学のような教育機関で学ぶことが望ましい。その目的に合わせて進路を選択することが重要と強調。社医学には、臨床で役立つ人材育成という伝統を継続してほしいと要望された。

西海奉成氏

理学療法学科昼間部2期生

株式会社トータルライフケア  
代表取締役



東京23区で訪問看護ステーション等10カ所を経営する西海氏は、セラピストとしての理学療法士の重要性を強調された。国の政策、指導によって理学療法士が活躍しづらい状況にあり、特に看護師と比べて人員配置の割合を少なくする制約が問題であると指摘された。

一方で、要介護人口の増加と入院日数の短縮が今後より加速することで、家族を含めた生活を援助できる優秀なセラピストが必要になることをアピール。在宅でのスムーズな看取りを推進するために、自社で取り組む「訪問看護ステーションを運営できる人材」を育てる大事さを紹介された。

堀田夏子氏

理学療法学科昼間部20期生

神奈川リハビリテーション病院



入職後の教育システムとそれを支える人間性について紹介された。

勤務先の病院では、入職後3年目までを新人教育と位置付け、4年目以降はより自主的で自律的な学習を進める段階、6年目以降は学習者であり教授者でもあるという認識で業務に当たっていると説明。知識・技術は入職してからも伸ばしていく。学生時代はコミュニケーション能力や継続力、物事への興味・関心など、豊かな人間性を養うことが大切だと強調された。サークル活動やアルバイト、ボランティアなど、さまざまな経験で培った体験が、理学療法士としての土台になっていくと語った。

## <シンポジウムの様子>



### 記念講演

## 「障害ある人々の尊厳と 自立をめざすアビリティーズ運動」

「障害ある人々の尊厳と自立をめざすアビリティーズ運動」を演題に、これまでの自身の歩みとアビリティーズ運動についてお話をされた。

1歳でポリオに罹患したことで下肢が不自由になった伊東氏は、就学や就職においてさまざまな困難を体験された。その苦労や口惜しさから、心身に障害がある人たちの自立と社会参加の実現を目的に、日本アビリティーズ協会を立ち上げられた。

伊東氏は「わたしは平凡な人間でありたくない。非凡な人間としてできれば『保障、よりも『チャンス、を選ぶこと…これこそわたしの願いである。わたしは、国家に養われ、卑屈で、怠惰な人生をおくことに満足できない。わたしは、夢をえがき、計算された冒険の道を求め、建設しつづける。——たとえそれが成功しようとも、失敗しようとも」という同協会の綱領を活動理念として紹介された。

もともと、アビリティーズ運動はアメリカのヘンリー・ビスカルディ氏を創始者とする。生まれつき両足がなかったビスカルディ氏が、障害者にも能力があることを証明し、健常者と同様に働く権利を保障されるべきだという理念を社会に承認させる活動を始めた。伊東氏は同氏との交流が日本でアビ



特定非営利活動法人 日本アビリティーズ協会  
会長 伊東弘泰氏

リティーズ運動を始める強いきっかけになったと語った。

日本でのアビリティーズ運動の成果としては、「障害者雇用促進法」と「障害者差別解消法」の制定が挙げられる。伊東氏はアビリティーズ運動を続ける中で、「福祉の問題」ではなく「人権の問題」だという認識が徐々に広がっていったと話す。一方、世界的には日本はまだ遅れていると指摘。例えば、教育面では障害者の大学進学率は2%未満で、残された課題も少なくないとした。

伊東氏は理学療法士・作業療法士の果たすべき役割について「海外では理学療法士・作業療法士も独立自営ができる」「社医学の教育活動をもっと社会へ向け拡大してほしい」と述べ、「社医学の卒業生は非常に仕事熱心。創立者の下河辺征平先生の思いを大事に、発展させてほしい」と期待された。

日本で理学療法士・作業療法士が誕生した年とアビリティーズ運動を始めた年が偶然にも一緒だったと話され、「障害者が生きてきてよかったなどいえるような社会にする」ために、理学療法士や作業療法士、言語聴覚士に身近なところで助けていただきたいと注文された。



# shigaku

2025年4月  
作業療法学科昼間部開設！



広報誌「社医学ひろば」 2024年 No.6  
発 行 学校法人 日本リハビリテーション学舎  
東京都小金井市中町2丁目22番32号  
TEL 042-384-1030  
FAX 042-385-0118  
HP <https://www.sigg.ac.jp/>  
発行人 山田千鶴子  
発行日 2024年4月

